

宍道湖・中海水産振興対策検討調査 基礎調査 漁業実態調査

内田 浩・福井克也・中村幹雄・山根恭道・清川智之・重本欣史

漁業の振興を図るためには、まず現状の漁業の実態を把握することが必要である。しかしながら、近年中海における漁業の実態調査は実施されておらず不明な部分が非常に多い。また、宍道湖においては小型定置網の漁獲統計資料が整備されているものの、その他の漁業種類については未整備である。したがって、この調査で現在の漁業の状況を把握して、今後の水産振興策を検討するための資料とする。

なお、平成9年度は、中海を対象として調査を実施した。

調査方法

1. 既存資料の整理

松江水産事務所等にある資料を整理する。許可漁業別の漁業者の氏名、住所等の資料を整理して、各地区の漁業者数、漁業種類等を把握する。

2. 標本船調査

標本船を選定して野帳の記入を依頼する。野帳回収後、漁業種類ごとの操業位置、漁獲努力量および漁獲量等を推定する。

3. 漁獲物買い取り調査（生物測定）

漁獲物を買取り魚体測定を実施する。そして、漁獲される魚種、漁獲量、体長、体重および生殖腺重量等を把握する。対象としたのは、小型定置網（マス網）、刺網及び採貝である。また、小型定置及び刺網では、1網に漁獲された魚種全てを買取った。したがって、測定した魚種には投棄魚も含まれている。

結果及び考察

1. 既存資料の整理

表1に中海における市町村別許可漁業種類別の漁業者数を示す。中海には4種類の漁業が許可されているが、漁業者数より磯さし網とマス網が中海における代表的な漁業種類であると言える。その他許可漁業ではないが、延縄や採貝も行われている。

表1 中海における許可漁業種類別漁業者数

許可漁業種類	安来	東出雲	松江	八束	美保関	合計
あみえび機船船ひき網	5	3	10	2		20
ぼらまきさし網	5					5
固定式さし網	35	9	16	136	25	221
小型定置（マス網）	44	12	58	31	14	159

2. 標本船調査

平成9年4月から7月にかけて漁協及び各地区で調査の主旨や実施方法の説明会を開いた。そして、8月より計42名に依頼して野帳の記入を開始した。

ここでは平成9年8月から平成10年3月までの集計結果を元に、漁業種類別の漁獲対象魚やそれが漁獲量に占める割合等を報告する。なお、標本船野帳の回収率が月により差があること、回収した漁獲金額を記入されていない標本船野帳もあることより、集計は下記の方法を取った。

- ① 各月において漁業種類別魚種別に漁獲量を集計する。
- ② ①を出漁日数で除すと、月別漁業種類別魚種別の1日漁獲量となる。
- ③ 各月で算出された②を平成9年8月から平成10年3月まで合計する。
- ④ 魚種別の③を合計して、百分率で表す。

漁獲金額も同様に行った。

刺網

図1に標本船調査における刺網の魚種別の漁獲割合、図2に魚種別の漁獲金額の割合を示す。

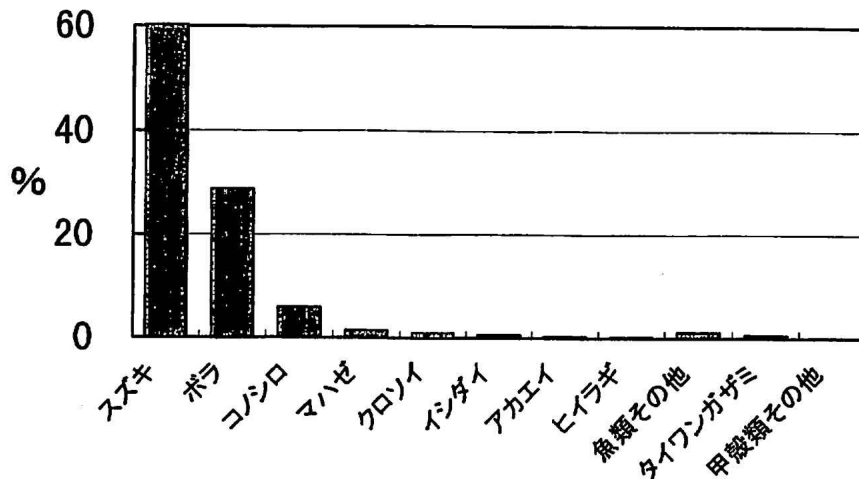


図1 標本船調査における刺網の魚種別漁獲割合

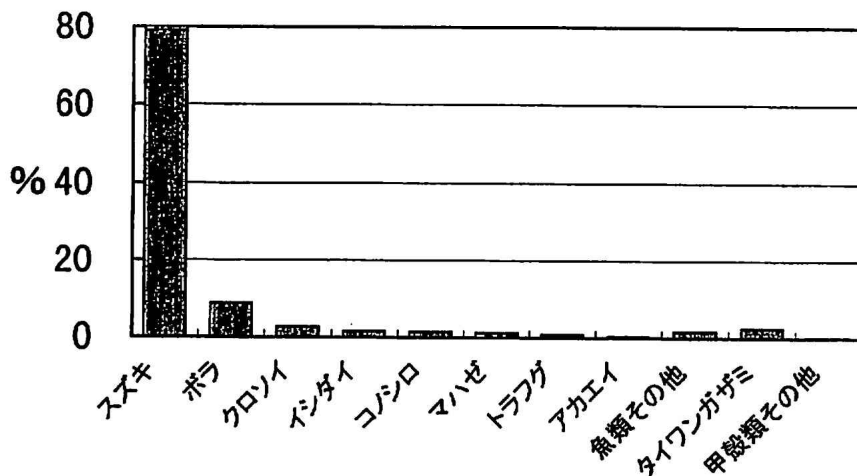


図2 標本船調査における刺網の魚種別漁獲金額割合

刺網においては、スズキ及びボラが漁獲の大部分であり、この2種で漁獲量の90%以上を占める。金額面で見てもスズキが80%占めている。その他、コノシロやマハゼの漁獲量も比較的多い。単価の高いトラフグやクロソイも重要な漁獲対象となっている。甲殻類としてはタイワンガザミが多く、他の甲殻類の占める割合は非常に小さい。

小型定置網（マス網）

図3に標本船調査における小型定置網の魚種別の漁獲割合、図4に魚種別の漁獲金額の割合を示す。

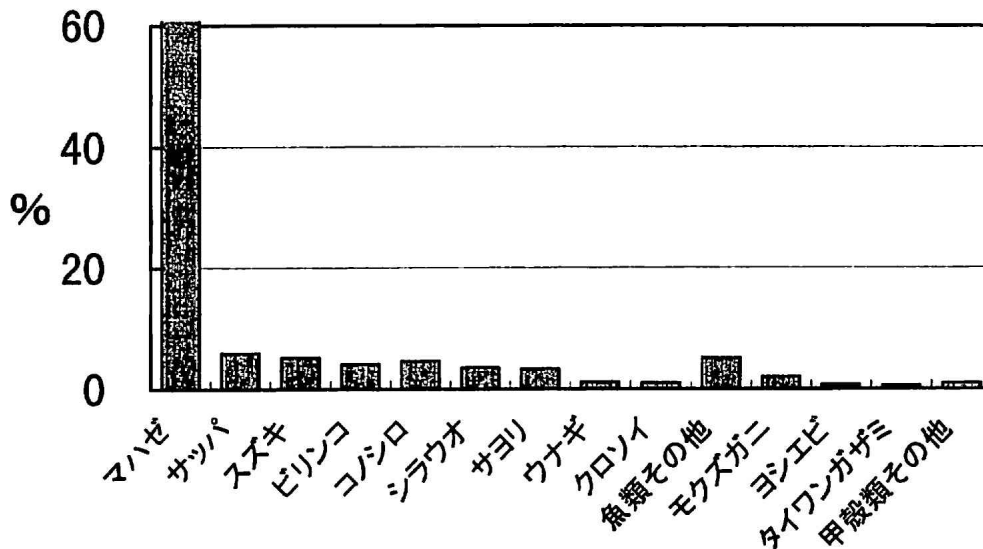


図3 標本船調査における小型定置網の魚種別漁獲量割合

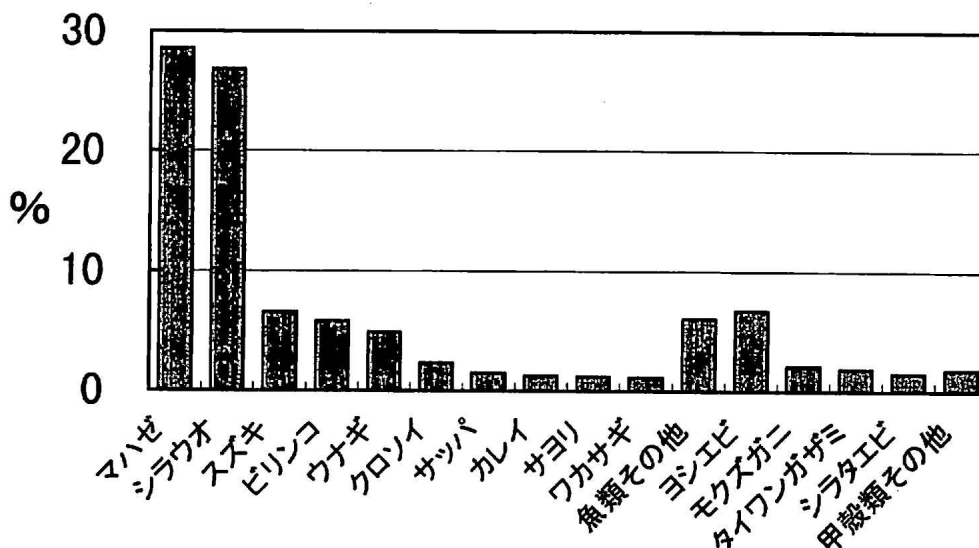


図4 標本船調査における小型定置網の魚種別漁獲金額割合

マス網に漁獲される魚介類は非常に多いが、マハゼが漁獲量の約60%を占める。その他、サツパ、スズキ、ビリンコ（小型のハゼ 体長6 cm程度）、コノシロ、の漁獲量が比較的多い。このうちビリンコは、漁獲量が多いだけでなく単価が比較的高く重要種となっている。また、平成9年度はシラウオが豊漁であ

り、漁獲金額の27%を占めた。甲殻類ではモクズガニの漁獲割合が高いが、金額では単価の高いヨシエビの占める割合が高い。この他、タイワンガザミやシラタエビが多く漁獲されている。

延縄

図5に標本船調査における延縄の漁獲別の漁獲割合、図6に魚種別の漁獲金額の割合を示す。

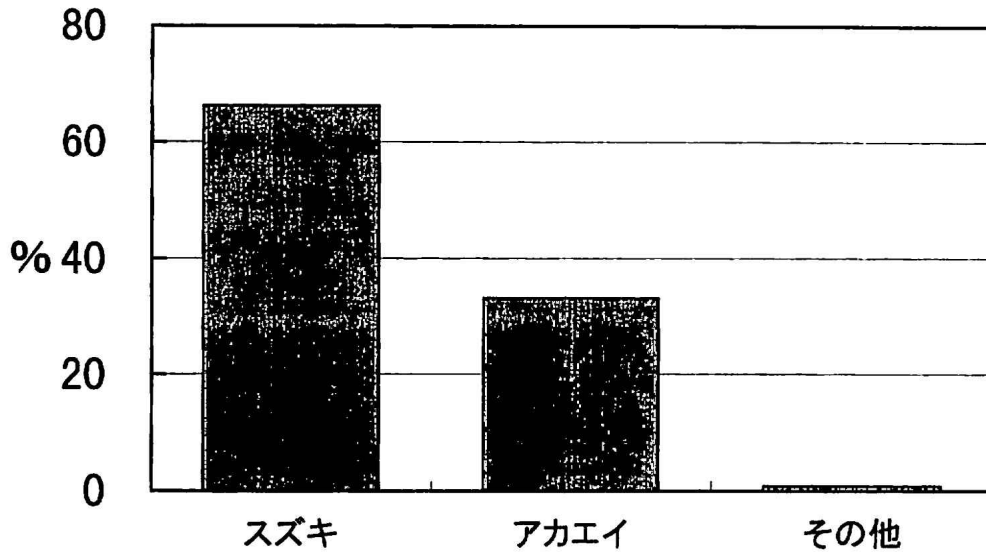


図5 標本船調査における延縄の魚種別漁獲量割合

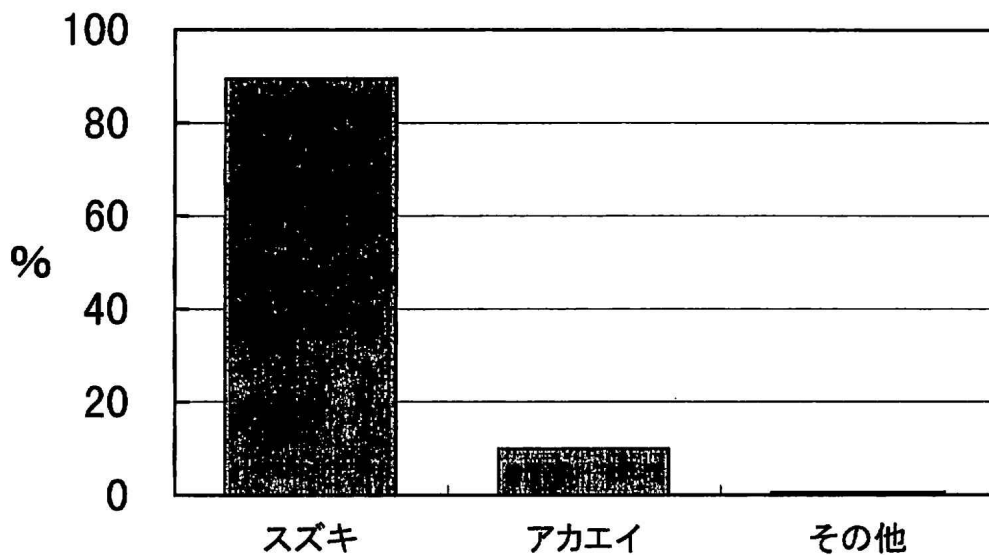


図6 標本船調査における延縄の魚種別漁獲金額割合

延縄が漁獲対象とするのはスズキであり、漁獲に占める割合は66%、金額では90%を占める。冬季になるとこれにアカエイが加わる。また、延縄を操業する漁業者は、安来から東出雲に多い。

採貝

採貝の漁業対象は主にシジミとアサリであり、わずかであるがこれにアカニシが加わる。かつて漁獲量が多かったサルボウの漁獲はほとんど見られなかった。また、漁業者により漁獲対象が分かれている。つまりシジミを対象とする人とアサリを対象にする人がいる。漁場としては、シジミが中海に流入する河川の河口域であり、アサリは西部承水路や境水道であった。

今年度、アサリの大量の死亡が確認された。これは塩分濃度の低下の影響とみられるが、操業を取り止める漁業者もあり、アサリの平均漁獲量は平年に比べて少ないと考えられる。

あみえび機船船ひき網

あみえび機船船ひき網は冬季に操業される。オダエビと呼ばれるアミエビ類を対象としている。

3. 漁獲物買い取り調査（生物調査）

97年8月より調査を開始した。計13回漁獲物を買取り、魚体測定を実施した。小型定置網及び刺網は付表1～10、採貝は付表11～12に示した。

小型定置網及び刺網における主な漁獲物は標本船調査結果と同じ様に、マハゼ、サッパ、コノシロの漁獲量が多かった。冬季になると、魚種及び漁獲量が減少する傾向にある。採貝は主にアサリを漁獲対象としている漁業者に依頼して実施した。漁獲対象サイズは、18～42mmで26～30mmにモードがある。また、サルボウは過去中海において重要種であったので特に依頼したが、漁獲量は非常に少なく採集できない日もあった。